

### 第3回 言語文化教育研究会 記録

日時・場所 2006/12/15 17:00~19:00 22号館818会議室

発表者：吉本恵子（文化外国語専門学校）

発表題目：グループワークを中心とした授業の評価について～失敗，試行錯誤，改善の過程を振り返る～

書記：市嶋典子

#### 2. 議論

##### ・ 教師の評価について

参加者 A：相互評価の中で，サポーター，学習者の評価は学校の評価の中でどのようなウエイトを占め，教師の評価との関係はどうか。

発表者：事前に評価の説明を行い，納得してもらった上で行う。学生からのアンケートの結果も良好で，学生からの理解は得られていたと思う。

参加者 A：サポーターや学習者の評価は良いものなのか。良かったとしたら，それはなぜか。

発表者：教師一人の評価では，気分の問題に左右されることもあって，正しい評価ができないこともある。たくさんの人の評価が必要で，この授業では一人だけではなく，たくさんの人の評価が必要であると伝えた。

司会者 A：参加者 Aさんの質問の意図は何か。

参加者 A：教師の評価に自信がないのか。人数が多ければ公正な評価になるのかということ。

発表者：教師の評価には自信がない。相互自己評価はどの授業にも通じるものではない。特異な例と言える。

##### ・ 教室の環境作りについて

参加者 B：居心地の良い環境づくりとはどのようなものか。対立があった場合，教師はどのように解決すれば良いのか。

発表者：ホスピタリティーについて教えた。日本のサービスは世界一ということを勉強した。また，11月に文化祭があって，出し物の練習をした際にグループ間の対立があった。そこで，皆で話し合わせるように，グループごとにポスターを作る協働作業をした。英語と自分の授業を5時間つぶして行った。このことによって関係はよくなった。また，サポーターや企業の人にも相談した。

参加者 C：サポーターはどのような動機で、どのくらい参加したのか。

発表者：JICA の研修生や教師養成講座の学生，大学生等が参加した。大学生は文法を教えられない点良かった。学生の質問に答えられなくても，変であるという点が指摘できればいい。その指摘によって学習者は日本語を自分で直す力がつく。大学生はいろいろな言葉で指摘してくれるので，学習者にとって魅力がある。異文化セッションになり，互恵性が育まれていく。ある意味，教室を日本の教室にしていくことができる。教師が何のためにこれをしているのか学習者に意識させていく。教室は三者が関わる協働の場になっている。

参加者 D：このような活動は初級学習者にもできるのか。

発表者：初級でも試みている。初級のサポートは上級サポートより忙しい。上級クラスで学習者同士，どのようなサポートがなされるのかを見たが，関係ができていない中ではサポートは生まれてこないということが分かった。初級でもクラスの関係作りを良くするための工夫があれば可能だと思う。

- ・ 評価の方法

参加者 E：学習者は教師より厳しい評価をつけているのが不思議だった。普通，学生は厳しく自己評価できないと思ったのだが，なぜこうなるのか。

発表者：教師は学生が努力した結果を高くつける。サポーターや学生は低くつける。教師は評価の付け方を意識化させていく役割がある。自分と相手の関係を考えなくてもいいと言う。特に韓国人は関係を気にするので，評価の際に国や文化を背負わなくてもいいというと，学生は厳しくつけてくる。また，評価の取り方には工夫が必要。先生の見ているところではアンケートを書かせてはいけないと思った。人のことは気にしないで，自分のことを見つめ，相手のことを客観的に見るようにと伝えると，学生やサポーターは教師の目を気にせず記入する。

参加者 F：聞き手を一人に絞ったプレゼンテーションでは，なぜ全部評価は A なのか。

発表者：これはテーマ科目であり，何か記事をまとめて発表するもの。聞き手を一人に絞った授業では，聞き手が評価を出して，全員 A になる。よく打ち合わせをして準備をしていれば A，明日につなげる評価として A をつける。

参加者 F：時間をかけてやったら A になるのか。

発表者：B をつける理由がないから。

参加者 F：伊藤園をやった人はできが悪かったと言っていたが，なぜ A なのか。

発表者：自分達には準備が足りなかった，相談ができなかったというフィードバックがあった。これは次につながるものとして捉え，A をつけた。本当の評価は卒業時に出る。キャリア教育なので，この授業が留学生活や人生の中でどんなことを示しているのか考えなければならない。それが明日につながることになる。

参加者 G：この活動は，プレゼンテーションの評価ではなく，活動全体の評価ということになるのか。

発表者：練習がよく出来ていても本番でできないこともある。一回かぎりのプレゼンテーションで評価を決めて良いのか疑問。

参加者 G：普通のテストでも、勉強してもできなかったというのはあるが。

発表者：言い訳シートというのがあって、なぜできなかったのかを書いて、次につなげていく。翻訳のテストもしているけれど、翻訳のテストは翻訳のテストで目的が違って来る。

参加者 G：プレゼンテーションの評価とテストは何が違うのか。

発表者：プレゼンテーションは就職のためのトレーニング。目的が違う。翻訳の授業には到達度があって、目的にあった評価がある。

参加者 G：今日、発表したものはプロセスを評価している。それは就職が目的になるのか。

発表者：良い就職に結びつけば良い。日本の社会の中で気持ちよく生活していくことが目的。

参加者 G：それと評価との関係は？

発表者：点数だけで評価はできない。専門学校の授業では研究、勉強だけではない。多様性がある。その人にあった評価をすることが大切。

参加者 G：そこに貫くものがあるのか。明日につながる評価とは・・・

発表者：この授業の中から自分で取ってね、と言う。

#### ・ 母語話者の優位性について

参加者 H：学習者の生涯において、このような評価はどのような意味があるのか。教育的観点から言うと。

発表者：それぞれが意識している。皆、日本が大好き。そのまま好きでいてほしい。悪い思い出がないように、何かを得たというふうに考えて欲しい。

参加者 H：サポーター、教師、学習者のしくみがあるが、日本人のサポーターと学習者の指摘に違いはあるのか。

発表者：言葉の明確化は日本人、文の流れは学習者というような違いがある。

参加者 H：学習者はサポーターに対して母語話者の優位性を感じることはないのか。日本人サポーターは語彙を与えてくれるマシーンになり、学習者が自分で言葉を作っていく場面がなくなるのではないか。

発表者：一緒に作っていくので、協働性がある。教師が指摘すると鵜呑みするが、サポーターの指摘ではディスカッションが起こる。

参加者 I：日本人のサポーターが表現を提示するというが、学習者がその中に言いたい表現がなかったらどうするのか。

発表者：その時は違うと言う。そして一緒に考えていく。本当に気に入った表現は、どんなに難しいものでも忘れない。同じ作文にその言葉が出てくるようになる。学生も、気に入らなかったらこの表現は私の言いたいことじゃないと言う。

参加者 J:プレゼンテーションの評価の中に「気持ちよく」という言葉が出てきているけど、気持ちいいというのはどういう意味なのか。

発表者:アサーションプログラムから。コミュニケーションの能力のトレーニングのようなもの。

参加者 J:心の中では～人でいいけど、外では日本人に合わせなさい、同化しなさいというふうに聞こえる。

発表者:そういうことではない。言いたいことを相手に伝えることが大切。就職したい時、どうするかというと、どうしても曲げたくないことを伝える時、嫌な感じに受け取られないように生きていくためのスキルが大切になる。そのスキルを教えることは同化にはつながらない。

- ・ 評価の目的

参加者 K:プロセスを評価するというのは納得できる。嫌な印象を与えないで言いたいことを伝えることがゴールで、就職につなげるのなら、聞き手の受け取り方が B でもショックを受けないのではないかな。

発表者:アサーションプログラムとプレゼンテーションの目的は違う。

参加者 G:何をもって成功とするのか。

発表者:15人の成功がある。

参加者 L:プレゼンテーション自体の評価はどうなるのか。プロセスを評価するというがプレゼンテーションの評価のための指標は十分なのか。

発表者:授業の目的は一人の為にプレゼンをすること。相手に伝えたい内容が分かれば良い。

参加者 L:明日につなぐことが何を目標にしているのか分からない。

発表者:改善ができればいい。

参加者 K:伊藤園が失敗とあったが、それは B になるのではないかな。A があって、B があっても良いのではないかな。プレゼンをどう評価し、プロセスをどう評価するのか。最初に出した評価項目と最後の評価にはズレがあるのではないかな。

発表者:学生の為に何かをやりたいという気持ちがある。評価も次第に変わってきている。

司会者 A:居心地の良い教室、将来につなげる活動というのは国際通訳学科のコンセプトなのか。吉本さんのコンセプトなのか。共通認識があるのか。

参加者 M:教師全体でコンセプトを共有している。

司会者 A:いろいろな授業に対して話したので、どことどう繋がっていたのか分かりにくかった。400字の作文を書くがあったが、なぜ400字なのかという議論はあったのか。

発表者:3ヶ月で10回しかない。600～800字より400字で3段落に分けて書くというのが適当だと考えた。

司会者 A：テーマは一つ？

発表者：毎回変わる。

司会者 A：なぜ毎回変わるのか。なぜ400字なのか。活動自体が何を目的にしているのか分からない。印象に残ったというアピール度で評価すると言うが、それはどんなものなのか。どうすれば良いのか担当者の側で方向性を持っていないと、学生の方では何をすればよいのか見えてこないのではないか。内容は何をどのように書いていけばよいのか、何を目標にするのかを示さないと、評価はできない。アピール度は印象でしかつけられない。

発表者：学生には光る言葉がある。それは個人によって違う。

司会者 A：良い内容の言葉は、光る言葉があれば良いのか。

発表者：それも分からない。グラフを見ると・・・

司会者 A：それは結果論。担当者として良い作文をどのように考えているのかというデザインがないと学生にも分からない。光る言葉があれば良いというのでもいいが、それで作文が書けるとは思えない。ポリシーを聞きたい。

発表者：活動に時間を費やした・・・

司会者 A：担当者の持っている方向性、何がいいのかという方向性が評価につながっている。方向性を持って書いていこうという合意が必要。

発表者：日本語学校では単純化していて、時間内に言いたいことを書く、人が読んで聞いてみたいものを書くという。

司会者 A：それはどうやって目指すのか。内容と構成と言っているけれど、内容については触れていない。

発表者：今回の発表ではたくさんのお話を話したのでフォーカスができなかった。

司会者 A：続きは次回に・・・

以上